

ドクターからの 健康アドバイス

- ※本ページの内容は当院の医療専門職が監修・執筆しています。
- ※内容は一般的な健康情報であり、診断・治療を目的としたものではありません。
- ※本ページには医師以外の医療専門職による記事も含まれます。

無痛分娩のアレコレ

無痛分娩とは、鎮痛剤を使用して痛みを取り除きながら出産する方法です。出産の痛みの軽減そのものが、無痛分娩の第一のメリットです。そのほかに、痛みが和らぐことにより取り乱さずに落ち着いて出産できることや体力を温存しながら出産できることが利点としてあげられます。

当院で無痛分可能な条件

1 正期産であること	2 硬膜外麻酔が 可能であること	3 安全に行えること
4 同意書にサインが あること	5 前納金10万円を 納めていること	

無痛分娩が行えないとき



- 穿刺困難（姿勢の保持困難・脊椎の変形など）
- 出血などによる低血圧
- 止血凝固異常
- 穿刺部位(背中・腰)の感染、全身性の感染
- 神経変性疾患
- その他医師が不適切と判断した場合

出産が進行している場合には、姿勢の保持困難のため麻酔が行えないことがあります。緊急手術がある場合などには、安全のため導入を待っていただくことがあります。また、早産(37週未満)の時期には無痛分娩は行っておりません。

当院の無痛分娩の特徴

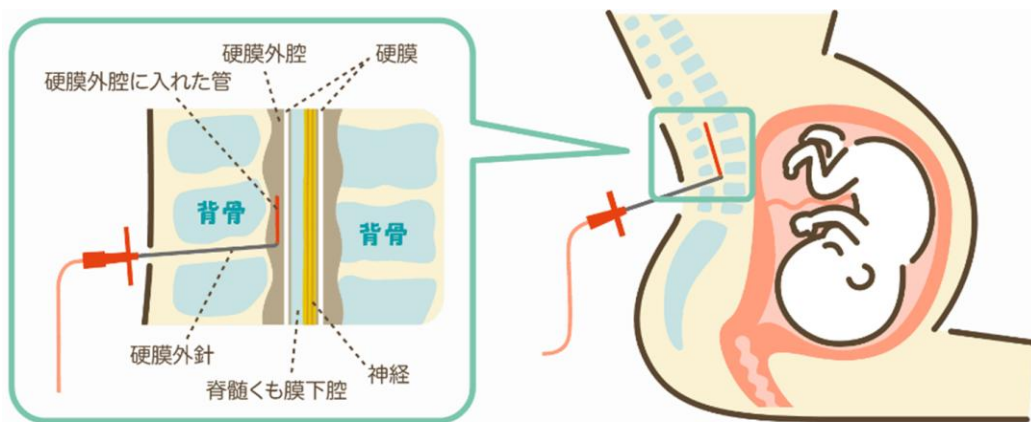
- 麻酔に関する処置は**麻酔科医**が行います。
- **24時間無痛分娩**に対応します (夜間は麻酔開始までお待ちいただくことがあります)。
- 医学的適応のない計画出産(無痛分娩)は行わず、陣痛発来時や破水のタイミングで入院していただきます。

麻酔方法

当院では硬膜外麻酔という麻酔方法を用いた無痛分娩を行います。背骨の中にある脊髄(背骨の中を通る太い神経)の周囲の硬膜外腔に、細いチューブを留置します。そこから局所麻酔薬を注入します。

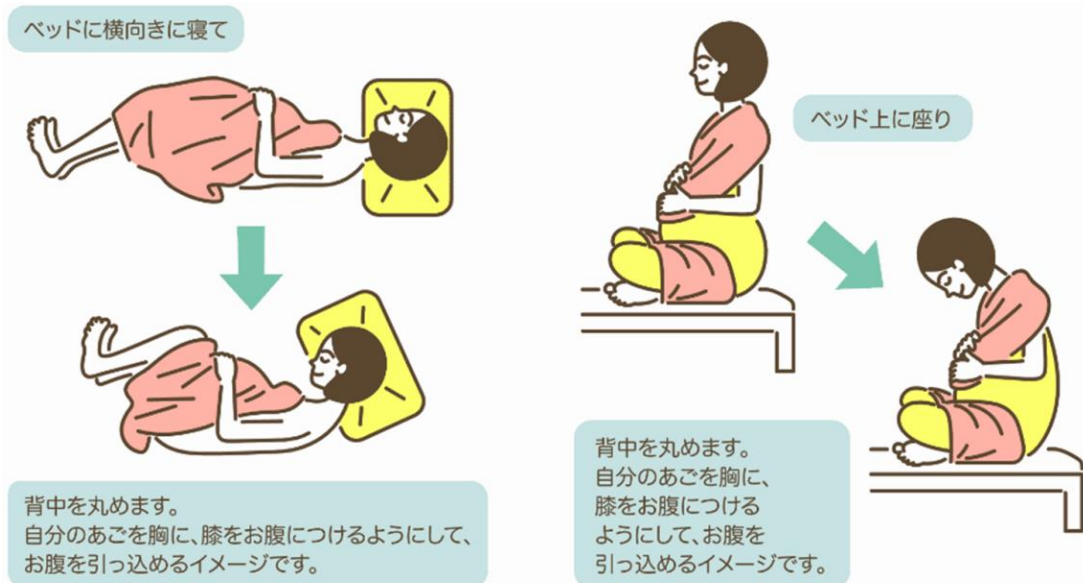
麻酔の効果が現れる範囲は、おなか・腰から足に限定されます。

全身麻酔ではありませんので、はっきりと目が覚めた状態で出産することが可能です。使用する麻酔薬の量は非常に少なく、薬剤が赤ちゃんに直接影響を与える心配はほとんどありません。



日本産科麻酔学会 出典参照

処置中は横になるか座り、背中を丸めた姿勢をとってもらいます。この姿勢がしっかりと取れると、操作が行いやすくなります。逆に、姿勢がうまく取れないと、処置に時間がかかったり行えない場合があります。



日本産科麻酔学会 出典参照



無痛分娩って実際どんな流れになるの？

- ①無痛分娩を希望することを、妊娠健診の際に担当産科医師に伝え説明を受けます。
- ②無痛分娩の予約をしたら、前納金10万円をお支払いいただきます。
- ③34週頃に産科医師より産科合併症について、麻酔科医師より麻酔および麻酔合併症についての説明を受けます。内容を十分に理解されたうえで、産科・麻酔科の同意書に署名して入院時に持参してください。
(説明を受けていない妊婦さんが、急に無痛分娩を希望された場合には麻酔開始までに時間がかかり、痛みのため十分に説明を理解できない可能性もあります。また、その場合には緊急料金が適用されます。同意書に署名していても無痛分娩をキャンセルすることもできます。)
- ④出産のために入院し、陣痛が開始すれば点滴を確保し、同時に採血をします。
- ⑤陣痛の増強、また分娩の進行期と判断したタイミングで、麻酔科医師によりチューブを留置し、麻酔薬の注入を行います。**麻酔薬を注入してから陣痛の痛みが軽くなるまでに20～30分程度かかります。**
- ⑥麻酔薬が効いている間は、足に力が入りにくくなることがあります。転倒などの危険を防止するために、無痛分娩中の歩行は控えてもらいます。
また麻酔の影響で排尿困難になることがあります。必要に応じて尿道に細い管を入れて導尿します。
- ⑦誤嚥性肺炎の危険性を減らすために、無痛分娩中は原則として飲食を禁止し、水分は点滴で行います。
- ⑧痛みに早く対応するために、**妊婦さん自身に麻酔薬の追加ができるボタンを押してもらい、薬を追加することを行っています。**
- ⑨出産後、分娩に関する処置がすべて終われば、麻酔薬の注入を中止しチューブを抜きます。

当院では安全に無痛分娩ができるよう
予約枠の数を制限させていただいております。
予約は12週から可能です。
ご来院の上、診察時に主治医とご相談ください。

※予約に空きがない場合はキャンセル待ちと
なりますことをご了承ください。



ご不明な点がございましたら、診察時にお気軽にスタッフにお尋ねください。